

2009年3月4日(水)

学校教育高度化センター
研究報告会

高等学校における授業改革の調査研究

【研究グループ】

杉下	奈美	(学校教育高度化専攻	教職開発コース)
鈴木	悠太	(学校教育高度化専攻	教職開発コース)
渡邊	福太郎	(総合教育科学専攻	教育学コース)
申	智媛	(学校教育高度化専攻	教職開発コース)
久保	健太	(総合教育科学専攻	教育学コース)
荒井	英治郎	(学校教育高度化専攻	学校開発政策コース)

【指導教員】

佐藤 学 教授

【本日の内容】

1.問題と目的

(1)問題の設定

(2)先行研究の検討

2.対象・方法・仮説

(1)調査の対象と方法

(2)仮説

3.考察

(1)「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの4類型に即した各事例の意味付け

(2)総合考察

(3)今後の課題

1. 問題と目的

(1) 問題の設定

【研究目的】

高等学校において授業改革に取り組む7人の教師を対象とし、7人の教師による授業改革を事例として、個々の教師がいかなる構想の下に授業改革に取り組み、どのような困難に直面しているのかを検討する。

- 変動する社会において、社会参加の窓口に位置付く高等学校における授業の質が問われている。
- 事実、高等学校における授業を改革する新しい試みがいくつも積み重ねられ、新たなうねりを形成している。
- しかし、「高校の授業研究の空白」(佐藤1996)や、高校教師に関する研究の蓄積が不十分な状況にある(油布2009)。
- 高等学校における授業改革の挑戦を一定の分析枠組みに即して検討し、その枠組みと記述された事例について考察する。

1. 問題と目的

(2) 先行研究の検討

1. 高等学校の授業改革を対象とした先行研究の問題

■ 高校教育の中心は授業にあるにも関わらず、授業改革を扱った研究が極めて少ない。

- ・ 高校教育改革を論じる際に、授業を対象としていないこと
- ・ 授業を対象としたものは、実践記録になっていること

(例)『講座 高校教育改革』編集委員会編(1995)

- ・ 教科ごとの学習内容、その指導法、生徒の学びといった授業を構成する要素が、個別に論じられている。

→ 教科の専門性が高まる高校における学習内容、その組織化、生徒のアイデンティティの形成：高校教育を特徴づける要素

1. 問題と目的

(2) 先行研究の検討

2. 分析枠組みを用いた事例研究によるアプローチ

- 個別の実践事例を対象としつつ、授業改革の実践を貫通する枠組みに基づき、これらの要素を統合的に、相互の関わり合いにおいて検討する必要
- ・ 教科ごとの実践記録ではなく、高校の教師が教養をどのように構想しているのか、その構想のもとにいかに授業を組織しているのか、そしてその授業において生徒がいかに学んでいるのかを検討する必要
- 研究課題：七つの授業改革の事例について、高校教育において求められる教養とその組織化との関係に着目した分析枠組みを用いて、高校の教師がどのような教養を構想し、組織化しているのか、またその際どのような困難に直面しているのかを明らかにする。

2. 対象・方法・仮説

(1) 調査の対象と方法

【調査対象】

- ・学校や担当教科が異なる7人の教師
- ・教職経験20年以上
- ・高校数は計6校

【調査期間】 2008年9月から2009年2月まで

【調査方法】 ・授業の参与観察(一単元以上)
・教師へのインタビュー

【分析方法】

記録を全て文字化し、以下の側面から分析。

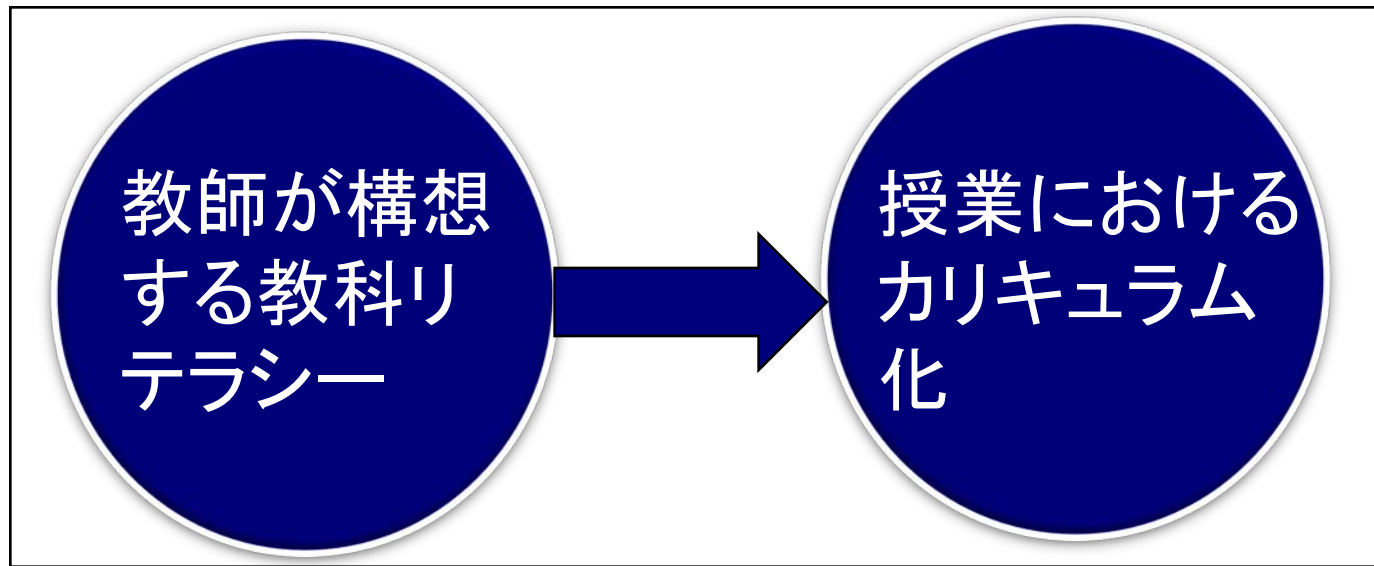
- (ア)個々の教師が構想する教科リテラシーの特徴
- (イ)教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化
- (ウ)授業改革において教師が直面している困難

2. 対象・方法・仮説

(2) 仮説

◎高等学校における授業改革の分析枠組み

＝「教師による教科リテラシーの
授業におけるカリキュラム化」



- 授業改革過程＝個々の教師が構想する教科リテラシーが、授業におけるカリキュラムとして変換される一連のプロセス。
- 「教科リテラシー」＝各々の教師が、現代社会の要請への対応を意図しつつ構想する教科の教養。
- 「授業におけるカリキュラム化」＝各々の教師が構想する教科リテラシーを生徒の学習履歴として授業において具体化するための方法的組織化。

2.(2)

◎「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの段階的 4類型

第1類型: 教師による教科リテラシーの構想と授業におけるカリキュラム化とが、つながらない段階。

第2類型: 教師による教科リテラシーの構想と授業におけるカリキュラム化とが、両者の内実が不安定であるために十分に接続していない段階。

第3類型: 教師による教科リテラシーの構想と授業におけるカリキュラム化とが、つながっている結実した段階。

第4類型: 教師による教科リテラシーの構想と授業におけるカリキュラム化とが、つながることを通して、相互に反省的に発展する契機を含んでいる段階。

→(ア)教師による教科リテラシーの構想、(イ)その授業におけるカリキュラム化、そして、(ウ)授業改革における困難の具体化へ

3. 考察

(1)「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの4類型に即した各事例の意味付け

①第3類型におけるヴァリエーションを示す5事例

- 本研究が対象にした7人の高校教師による授業改革の過程は、第1類型と第2類型に分類される事例は見当たらなかった。
- 「教師による教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの段階的類型は、まず第3の類型において結実した形で現われることが予想されていた。
- 以下5つの事例が第3類型を示していた。

3. 考察

(1)①第3類型におけるヴァリエーションを示す5事例

教師名(教職暦、教科)	吉田教諭(23年目、地理)	上杉教諭(28年目、現代社会)
教師による教科リテラシーの構想	<ul style="list-style-type: none">■社会参加の作法として、学習課題を媒介に他者と話し合い、自ら問いを立てることができる。■生徒だけではなく教師自身も獲得することが目指される。	<ul style="list-style-type: none">■論争的な問題についての論点を対比し、その上で自分の立場を決定する能力。
授業改革の現在	<ul style="list-style-type: none">■毎授業ごとに協働学習を組織。	<ul style="list-style-type: none">■ディベート活動を中核とする授業。
授業を改革する上での困難	<ul style="list-style-type: none">■生徒たちの他者と繋がる経験の少なさ。	<ul style="list-style-type: none">■論点の対比を生徒によるチームによって維持すること。

教師名	田中教諭(29年目、ライティング)	佐々木教諭(30年目、美術概論)	小林教諭(29年目、リーディング)
教科リテラシー	<ul style="list-style-type: none"> ■英文の構造を把握し、論理的思考能力を身につけ、翻って日本語の構造をさらに理解すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ■社会的活動としての芸術の知識を身につけること。 ■芸術活動に必要な技術の側面を補う。 	<ul style="list-style-type: none"> ■多様な題材の英文内容の理解を通して、市民として十全に社会参加できる英語力。
授業改革の現在	<ul style="list-style-type: none"> ■グループ学習の組織。 ■英文の構造理解において、専門用語や法則を共有して活用する言語共同体の構築。 	<ul style="list-style-type: none"> ■教諭自身による当事者としての芸術活動の経験を豊富なスライド資料として準備し、その知識を生徒に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ■グループ学習。 ■教材の英文の内容について思考し、その理解について議論することを通して、英語を身体に染み込ませる。
授業を改革する上での困難	<ul style="list-style-type: none"> ■「教える」という考え方から抜け出すこと。 ■日本語との比較へ。 	<ul style="list-style-type: none"> ■生徒による議論を組織する授業へ。 	<ul style="list-style-type: none"> ■生徒が授業によく参加しているにもかかわらず力がつかない。

3. 考察

(1)「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの4類型に即した各事例の意味付け

①第3類型におけるヴァリエーションを示す5事例

- 仮説設定時の予測に反して、これら5つの事例においてはいずれも何らかの困難が生じており、安定したプロセスのみが見られたわけではない。
- 第3類型として捉えられる実践であっても、第4類型で想定した「教師による教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」における相互作用つまり授業に具体化する上での省察的実践の契機を必ず含みこむものであった。
- この意味において、第3類型そのものもさらなる授業改革に向けた途上にあるものとして位置付け直される必要がある。

3. 考察

(1)「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの4類型に即した各事例の意味付け

②第3、第4類型の両側面を示す2事例

- 第3、第4類型の側面を持つ事例には、授業改革における困難がより直接的に表面化している。
- その契機は、絶えざる授業改革への要求が生み出した積極的な方向性を持つものと考えられる。

3. 考察

(1)「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」モデルの4類型に即した各事例の意味付け

②第3、第4類型の両側面を示す2事例

教師名	梶山教諭(30年目、美術 I)	清水教諭(33年目、日本史)
教科リテラシー	<ul style="list-style-type: none"> ■3段階の構想 <ul style="list-style-type: none"> ■芸術家としての自覚、最低限の基礎。 ■自分でテーマを決めて絵を描けること。 ■作品が自分の表現だという実感。 	<ul style="list-style-type: none"> ■未来を考える際の参考としての日本史。 ■<u>社会力またはキャリア能力の獲得。</u>
授業改革の現在	<ul style="list-style-type: none"> ■抽象絵画による色彩と構成の要素の前面化。 	<ul style="list-style-type: none"> ■グループ学習の組織。 ■グループ学習で解くプリント。
授業を改革する上での困難	<ul style="list-style-type: none"> ■さらなる「<u>教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化</u>」への要求。 	<ul style="list-style-type: none"> ■独自の評価枠組みの設定。 ■2勝8敗という振り返り。

3.(1).2

- 梶山教諭(美術 I)は「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」における2段階の上昇的な相互作用を示していた。
- まず、梶山教諭の事例において、生徒が作品のなかで示した反応が契機となり、当初のカリキュラムが変更を迫られた。キュービズムという技法の教授が図らずも、歴史的に後続する表現的抽象へとつながる表現を生み、当初キュービズム・構成的抽象・表現的抽象という順序で授業が組織されていたものを、キュービズム・表現的抽象・構成的抽象の順序へと発展的に組み替えられた。
- さらに、このカリキュラム化における教授内容の再編成は、「表現の習得」という具体的な段階にある教科リテラシーが想定以上に首尾よくカリキュラム化されたことによって、「芸術家としての自覚」というより抽象的かつ本質的な教科リテラシーのカリキュラム化への要求を生み出すという上昇的な相互作用を生み出した。

3.(1).2

- 清水教諭(日本史)の授業改革は、グループ学習の組織に特徴づけられるが、これは清水教諭が構想する教科リテラシーに変化が生じたことから導出されたものではない。むしろその教科リテラシーの根幹は、授業改革の経験を経てもなお一貫している。その根幹とは、「未来を考える際の参考としての日本史」という教科リテラシーであり、「なぜ」を追求する授業づくりにおいて一貫して具体化されている。
- 清水教諭は、日本史の授業にグループ学習を組織するという挑戦を通して、その新しい手ごたえから、現代社会に必要とされる「社会力」や「キャリア能力」といった言葉で新たな教科リテラシーとしての意味付けを始めている。
- グループ学習に取り組む生徒の新しい姿を目にし、教師としての手ごたえに支えられながら、清水教諭は、2勝8敗と表現されていたように今なお授業改革の途上にあつた。

3.(1).2

- このように、梶山教諭と清水教諭の事例における第4類型の側面は、授業の改革という新しい挑戦が生み出した生徒の新しい学習履歴すなわちカリキュラムの実際に触れることによって、自身が構想する教科リテラシーを更新する過程を示していた。
- このことから、第4類型における教科リテラシーと授業におけるカリキュラム化間の相互作用は、生徒へのさらなる要求へと向かう積極的な側面を示している。
- なお、本研究が対象とした授業改革の過程は、7人の高校教師の実践における一断面にすぎないことから、第3類型に分類された事例においても、そこで萌芽的に見出された困難への今後の対応により、教科リテラシーの構想と授業におけるカリキュラム化の省察的な発展の過程が生み出されることが推測される。

3. 考察

(2) 総合考察

1. 教師が構想する教科リテラシー

- 教科内容を超えて広がる教科リテラシー

高度知識社会：文脈を付与され、相互に関連しあう多様な知識を要請

- 広範な教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化
リテラシーとそのカリキュラム化との間の質的な距離
→授業改革における困難と関わっていたのではないか。

3. 考察

(2) 総合考察

2. 「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」における授業改革の可能性

- 教師が構想する教科リテラシーは常にカリキュラム化の途上であり、より良いカリキュラム化への可能性を残している。

→ 教師が、社会の要請に応じて教科リテラシーを真摯に掲げる限り、授業でのカリキュラム化において授業改革の可能性が開かれている。

3. 考察

(3) 今後の課題

1. 教科リテラシーの形成過程に関する問い

■ 第3類型と第4類型の関係

時間的移行(前者→後者 or 後者→前者)を示すのか、両者が不断に循環するのか。

→教師が成長していく過程で、教科リテラシーとその授業におけるカリキュラム化はどのような関係を示すのか。

3. 考察

(3) 今後の課題

2. 教科リテラシーとそのカリキュラム化との間にある質的距離において生じる学びの可能性

- 両者が質的に異なる次元にあるということ
→ 学びの可能性が生じるのではないか。
- 「教科リテラシーの授業におけるカリキュラム化」過程において、子どもの学びはどのように生じているのか。

【引用文献】

『講座 高校教育改革』編集委員会編(1995)『学びの復権—授業改革(講座 高校教育改革2)』労働旬報社

佐藤学(1996)「高校における授業研究の課題」佐藤学『カリキュラムの批評—公共性の再構築へ—』世織書房

油布佐和子編(2009)広田照幸監修『リーディングス 日本の教育と社会 第15巻 教師という仕事』日本図書センター